

国際農機展

国際農機展 8年ぶり開幕 過去最多119社・団体出展 最新農機2000点並ぶ

2014年7月10日

「第33回国際農業機械展 in 帯広」が10日、帯広市の北愛国交流広場を会場に開幕した。国内外から過去最多の119社・団体が出展、技術の粋を集めた最新農機約2000点が並び、雨の中でも多くの農業関係者らが詰め掛けた。最終日の14日までで20万人の来場者を見込み、農業の未来を感じさせる展示を繰り広げる。



農業の未来を体感できる最新農機が並んだ「国際農業機械展 in 帯広」。開幕直後から多くの来場者でにぎわった

同展はホクレン、北海道農業機械工業会、十勝農業機械協議会の主催。テーマは「次世代農業へ新たな挑戦」。海外からの出展も韓国、中国、イタリア、ドイツ、フランスの5カ国と過去最多になった。

4年に1度開催しているが、前回（2010年）が国内の口蹄（こうてい）疫発生で1年延期され、翌11年は東日本大震災で中止となったため、8年ぶりの開催となる。

会場には農地の大規模化に対応した大型農機や、ICT（情報通信技術）を詰め込んだ最新鋭のトラクターな

どが所狭しと並び、来場者の目を引いた。士幌町から訪れた畑作農家の服部秀樹さん（38）は「GPS（全地球測位システム）など情報技術は間違いなくこれからの主流。8年ぶりなのでとても楽しみ」と目を輝かせた。

十勝の食と観光をテーマにした「フードバレーとかち食彩祭2014」（実行委員会主催、14日まで）も同時開幕。十勝の食材を使った多彩なメニューの提供や販売など40店が出店し、行列ができた。

午前10時からの開会式には吉川貴盛農林水産副大臣、高橋はるみ道知事も出席。十勝の開拓期を支えたばん馬、最新トラクター8台、無人のロボットトラクターによる、農業の過去・現在・未来を体感するパレードが行われた。

開催委員会の有塚利宣会長は「道内、全国、海外からも多くのお客さまが訪れてくれた。日本の最高技術のオリンピックとも言える。素晴らしい日本の知恵と技を見てもらえれば」と歓迎した。来賓として吉川副大臣、高橋知事、ホクレンの佐藤俊彰会長、開催地の米沢則寿帯広市長もあいさつした。

出展社を代表して日本ニューホランド（札幌）の後藤勝造営業副本部長が「十勝から世界に向けて発信したい」と決意表明した。引き続き、中川郁子、清水誠一両衆院議員も加えて11人でテープカットが行われた。

国際農機展 売りは大型、ICT 400馬力のトラクターも

2014年7月12日

帯広市北愛国交流広場で開催中の「第33回国際農業機械展 in 帯広」（14日まで）では、経営の大規模化に合わせた農機の大型化とICT（情報通信技術）化が二大傾向となっている。会場では十勝の主力の2倍以上の400馬力を超えるトラクターや、国際共通規格で農機をコンピューター制御できるシステムに対応した機械を、各社が前面に打ち出している。

十勝の1戸当たりの耕地面積は約38㌔で、10年前に比べおよそ10㌔増えた。2025年には46.3㌔に達するとの予測もあり、若手農業者の多い十勝といえども、少子高齢化による担い手の減少と大規模化は避けられない。

そうした中、農業機械も大規模化への対応を迫られている。帯広畜産大学の佐藤禎稔教授は「前回（2006年）出展されていたトラクターの主力は120～130馬力だった。今回は150馬力前後が中心では」とみる。

輸入農機を扱う日本ニューホランド（札幌市）は最大馬力419馬力のトラクターや、824馬力の自走式収穫機を展示。前後に取り付けた標準的な大きさのトラクターを、中央のトラクターで持ち上げるというパフォーマンスでパワーを見せつけた。見学した音更町の農家の男性（35）は「さすがに400馬力は十勝でも実用的とは言えないが、今後も農機が大型化していくのは間違いない」と話す。